

陽暦四月九日に川崎宿に泊まり、夜盗に入られ顕微鏡他をぬすまれている。残念なことに植林系通詞は同行していないが、何か縁の切れない幻想を感じる。それは長崎銭座町の天王山聖徳寺の植林家墓地の反対側奥の通詞系墓地に、植林博太郎（順天堂大学神経学講座創立時の教授）氏の建立された新墓もあり、モーニツケ、川崎、深瀬氏、順天堂、植林家、長崎とは牛痘接種史の輪でつながっているからである。筆者は次に長崎に行くときは、この本を持って聖徳寺の石段を登ると決めている。

いろいろの視点からも、役立つ著作であるので各方面の方々に是非ご一読いただきたいと存じます。

(中西 淳朗)

〔発行所 出門堂<sup>シツモンドウ</sup> 福博印刷竹文化事業推進室、〒八四九〇九一八 佐賀市兵庫南四丁目二番地四〇号、電話〇九五二（二五）二九八八・直通、定価一〇九五円・税別〕

篠田 達明 著

『歴代天皇のカルテ』

さきに『徳川将軍家十五代のカルテ』の好著を発刊された篠田氏が今度は一二五代にわたる天皇家のカルテに挑戦された。

日本人はどんな病気にかかるか、どんな病気で死ぬか、い

ろいろな研究があるけれども、日本人の代表として一二五代つづいた天皇家歴代のカルテを見れば手っ取りばやくわかるというものである。宮中奥深く居住して庶民クラスとは生活環境が違うといっても、庶民の間に流行した病気はいずれは皇居内にも及び、避けることはできないものである。万世一系で遺伝的素質が違うといっても、日本人である以上DNAは同じであろう。天皇家の病気は日本人の病気の象徴でもある。

そういう意味でこのたび篠田達明氏が著された『歴代天皇のカルテ』は日本人の病気史でもある。

庶民の病誌はほとんど残されなくて煙滅してしまうが、天皇家のそれは時代によつて異なるとはいえ、なんらかの形で残されることが多い。著者は多くの史書を渉猟して克明にそれを追跡し、生々しく描き出してくれた。

圧巻は本書の巻末に載せられた『歴代天皇一二五代のカルテ一覽表』である。これに見る歴代天皇の病歴・死因の実態から感ずることは古代から江戸時代までと近現代との間に大きな断層が見られることである。著者によると、明治以前の日本人の死因として最も恐れられた病気は痘瘡であつて、今は見られないこの疫病により、平安期から江戸期まで、七六帝のうち三七帝が罹患し、さらに後朱雀、六条、後光明、東山、孝明の五帝がこれによつて急逝されている。また日本列島はかつてはマラリア列島といつてもよいほどマラリア原虫（三日熱）が地方的に存在していて、マラリアにかか

る経験は日常的に見られたものである。多くの天皇方もこれに悩まされていたが、今はまったく見られない病気となった。

著者が力を注いだ考察に、天皇の生母が正室であるか側室であるかの調査がある。著者の前著『徳川將軍家十五代のカルテ』でも行なったところであるが、生母が皇后や中宮等から生まれた嫡出子であったか、側室の宮妃や宮女から生まれた非嫡出子（庶子）であるかによって、健康状態も違えば寿命も違うという論である。古代の伝説時代を除き実在が確実とされる二六代継体天皇以後では、前者は二八人、後者は七五人であったという。そして前者の平均寿命は四四歳であったのに、後者の平均寿命は五〇歳であって、側室から生まれた天皇の方が丈夫で長生きしていると結論付けている。その上で現在の天皇家もこのままでは皇統を保つことが難しくなるのではないかと懸念しているが、はたしてどうか。

以上は本書の最後のいわば総括の章「病録の章」からピックアップしたものであるが、本書の大部分は、飛鳥・奈良時代、平安時代、鎌倉安土桃山時代、江戸時代、明治・大正・昭和の五章に分けて、各時代ごとに歴史上名を残した天皇の逸話を中心に組み立てられている。たとえば虚弱体質の劣等感から東大寺大仏を建立した四五代聖武天皇、菅原道真の怨霊を恐れて神経症になった六〇代醍醐天皇、今様の歌いすぎで慢性喉頭炎を患った七七代後白河天皇、徳川幕府との確執に

より痔疾に悩まされた一〇八代後水尾天皇、岩倉具視の毒殺が囁かれる一二一代孝明天皇、糖尿病から尿毒症に陥って侍医団が集中砲火をあげた一二二代明治天皇、周産期障害と晩年の脳病に悩まされた一二三代大正天皇、脾臓癌で崩御された一二四代昭和天皇まで、興味ある逸話で満ちている。

とくに本書で特異なのは天皇（一帝）の肖像画をかかげ、それから天皇の性格、体質について考察をめぐらしている箇所である。たとえば後鳥羽天皇の肖像では、「眉の辺りに激しい気性が感じられるが、にこやかでおどけた一面もありそうだ」とし、花園天皇の肖像画では「鼻筋が通り、おのずと気品が漂う、おとぼけが得意そうで何を申し上げても、まともに応じてもらえぬ雰囲気もある。多少好色の気もうかがわれ、人間味あふれるそのファニーフェイスには微笑を誘われずにはいられない」など独特の評が展開される。

歴史好きの医家にお薦めできる好著である。

（杉浦 守邦）

〔新潮社、東京都新宿区矢来町七一番地、二〇〇六年七月、新書判、二二〇頁、七〇〇円（税別）〕